

講演記録

## 清塚信也氏によるピアノが面白くなるトーク&ライブ！

2012 年 11 月 4 日（日）15:30 分開演  
同志社大学京田辺キャンパス 恵道館（KD）201

清塚 信也

◎久石譲：Summer

（映画『菊次郎の夏』より）～演奏～

（拍手）

皆さんありがとうございます。清塚信也です。  
今、久石譲さんの『Summer』を弾きました。

ピアノだけでなく、楽器というものは、歌詞の  
ついている歌よりも、むしろ、もっと心に伝える  
ものとして、強い力がある場合もあります。日本  
は『音楽＝歌』というふうになっていますけれど  
も、ぜひ、楽器の素晴らしさというものを、演奏の  
素晴らしさというものを、皆さんに知ってほしい  
なと思います。

今日はたくさん集まってくれました。皆さま、  
何か賢そうなお顔をして、インテリですか皆さん  
…。今、大学で勉強中なのかな…そんな顔立ちが  
多いような気がします。いつもなら「逆光でよく  
見えないんだけど…」と言うのですが、今日はばっ  
ちり見えますので、大丈夫ですよ（会場：笑い）。

さあ「クラシックといえばピアノ」ということ  
ですが…。ショパンという作曲家がいます。聞いた  
ことありますか？フレデリック・フランソワ・  
ショパン。ポーランドの作曲家です。彼は非常に  
有名な曲を残しました。しかし、200 年も前の曲  
です。200 年前の曲なのに、今現在、こうして日  
本にも伝わっているってすごいことだと思いき  
ませんか？CD が無い時代に、こんなにも難しいこ  
とを、楽譜一冊に残しただけでやってのけたショパ  
ンというのは、やはり価値があるのだらうと思  
います。ショパンは、2010 年に『生誕 200 周年』  
という記念すべき年を迎えました（清塚：会場を  
伺う…シーン）。ノーリアクション…！

いいんです！慣れてるから…（会場：笑い）。

200 年と言ってもピンとこないでしょう。し

かし、僕らピアニストにとっては、ショパン生  
誕 200 周年というのは非常に特別なものでした。  
ショパンというのは、ベートーヴェンやシューマ  
ン、シューベルト、いろいろな作曲家がいますが、  
そのなかでもかなり独特な人です。なぜかとい  
うと、オーケストラの曲をつくらなかったからなの  
です。当時、ようやく貴族から一般市民の手に渡っ  
た音楽…。このような広いところで演奏するとい  
うことがほとんどでした。そのため、楽器 1 台で  
の小さなコンサートというものは、ほとんど意義  
がなかったのです。そのかわりに、オペラや交響  
曲ですね、オーケストラでやるような大きな音  
が出るもの、それが人気でした。その流行りにま  
たく乗らずに、彼はただ、ピアノ 1 台で弾くピ  
アノ曲ばかりを作曲していたのです。かなり独特  
な人でございます。謎めいたところもかなりあ  
ったようです。そんなショパンは、170 センチの身  
長に 40 キロ台の体重、非常に細身。当時、結核  
という病気にもかかっておりました。そのショパ  
ンは、拍手もできないような、静かな緊張感のな  
かでピアノを弾くのが好きだったそうで、とて  
も神経質だったようです。

弾いている最中に「ゴホッ」と咳をすると「今、  
咳したの誰…？」みたいな感じで。（会場：笑い）。

まあ、僕のコンサートはいいよ、咳してもね。  
でも携帯電話は切っておいてください。以前、僕  
がコンサートで『展覧会の絵』（ムソルグスキー作）  
という曲を弾いていました。（展覧会の絵の冒頭  
部分を演奏）すると前のほうで、弾いている途中  
に、なんと（電話の着信音の如くディズニー曲を  
演奏）東京ディズニーランドのエレクトリカルパ  
レードの曲が…！見事なディズニーワールド！  
（会場：笑い）。すると、あろうことか次の瞬間、  
そのお客さんが電話に出て「今、コンサート中だ

から…！」(会場:笑い)。そんなことが無きよう、ぜひ、よろしくお願いします。

さて、ショパンのキャラクターイメージ、少しついたかな？それではショパンの曲を聴いてみてください。

◎ショパン：ノクターン第2番 変ホ長調 Op.9-2  
～演奏～

(拍手)

ありがとうございます。ショパンらしい曲ですね。ショパンは体があんまり強くなかったので、タフな曲はたくさん弾けませんでした。弾けないということは、自分で作曲しても仕方がないということなのです。難しい曲や激しい曲も書きたかったでしょうに、その願いが叶うことはありませんでした。しかし、ポロネーズという…マヨネーズじゃないよ、ポロネーズ (会場:笑い)。

このポロネーズのときだけは意外と勇ましい姿を見せてくれました。非常に男性的でタフな曲…。『英雄ポロネーズ』というショパンのなかでも非常に人気のある曲です。ポロネーズというのは、ショパンの故郷ポーランドに古くから伝わる踊りの名前です。ショパンが活躍していたのはフランスのパリですけれども、彼は、その踊りのリズム、ステップのリズムを使って、外国の地でも自分の故郷への愛を示していたということなのです。よく間違えて「英雄ポロネーズ」と書かれたりすることがありますが、ポロネーズですからね。『ポロネーズ』はスパゲティですからね (会場:笑い)。ということで『英雄ポロネーズ』。皆さん聴いてみてください。

◎ショパン：ポロネーズ第6番 変イ長調 Op.53『英雄』  
～演奏～

(拍手)

ありがとうございます。このショパン、非常に人気があって、当時のヨーロッパでは、今のアイドルのように、キャアキャア言われていました。

スターだったのですね。そんなショパン、人気ナンバーワンだったのですけれども、一人だけライバルがいました。『フランツ・リスト』と呼ばれる人物です。リストとショパンは、ひとつしか年齢が違わない。リストがひとつ年下なのですが、共通点が非常に多い。ピアノがうまい！

そしてピアノ曲をたくさん残して、良い曲がたくさんある！それに、いつの時代も人気の秘訣は変わりません…イケメンだった！…僕もですが (会場:笑い)。

共通点も多いのですが、奇妙にも二人は対象的なところも多かった。ひとつは体つき。ショパンが170センチに40キロ台という細身だったのに対して、リストはかなり男性的な筋肉質で、背も高い。手も大きな手です。1オクターブとよく言われますが、「ドレミファソラシド」でオクターブですね(1オクターブを実演)。この最初の「ド」から次に出てくる高い「ド」、これを1オクターブと言います。バッと手を広げたサイズです。さらに、ガッと思いきり広げると、小指がもう一個上の音「レ」まで届きます。大体ピアニストは「下のド」から「上のミ」ぐらいまで届きます。でも、ショパンの手、実は僕の手と同じサイズなのですが、非常に小さいのですね。あまり使い勝手がよくない。では、リストはどれぐらい大きかったかというと、1オクターブにプラスして、一つ、二つ、三つ、四つ…ここまで届きます！ドからソまで！僕の手で言うと、ちょっと後ろの方たちは見づらいかもしれませんが、親指がね、ここにありすね。(清塚：鍵盤を押さえながら) リストの場合は、なんと小指がここまで届く！気持ちが悪い (会場:笑い)。

うざったい手だね。そんなでっかい手をしててね、誰もマネできないような難しい曲を作曲して弾きまくりました。ショパンは、先ほどの『英雄ポロネーズ』を作曲するのに3年もかけています。1曲に…です。たった1曲に3年もかける。それぐらい真摯な姿勢で取り組んでいるショパンに対して、リストはかなりチャランポランで、もうほんとに数日間で土台だけつくって、あとは出たとこ勝負！即興で、その場のノリで曲を決めたりしていたらしいです。そんなチャラ男…チャラ男リスト！

ショパンは静かな曲で音楽性を聴かせるというのが得意でした。今で言うバラード系ですね。そしてリストはハードです。ロック！ハード！すごく技巧派で、ものすごく華やかに人を魅了するのが上手だったようです。だから「音楽のショパン」「技術のリスト」というふうに当時言われていたのは、リスト自身は気に入らなかったそうです。自分にはロマンがないのか…。自分にも音楽性はあるんだ…と言って、ショパンに対抗して『愛

の夢』という題名のノクターンをつくりました。ちょっと聴いてみてください。

◎リスト：愛の夢 第3番 変イ長調 ～演奏～

(拍手)

ありがとうございます。リストのことを、ここで検証してみましょう。ショパンとの『違い』、それについて少し簡単に触れてみます。(清塚：演奏しながら) この2曲、同じノクターンと呼ばれるタイプの曲で、同じような曲想で始まります。静かで、愛をささやいているようなロマンティックなメロディ。それがノクターン。日本語で言うと夜想曲。「夜に想う曲」と書きますけれども、まさにそのネーミングがぴったりです。先ほど、ショパンのノクターン第2番を弾きました。このノクターン、最初から最後まで大体同じ曲想で終わります。

しかし、リストの『愛の夢』はどうでしたでしょうか？ 始まりは似ているのですが、途中でものすごく早くなったり大きくなったりしましたね。これはリストの悪い癖です(会場：笑い)。

そう、彼は技術があるがために、それを披露せずにはいられないのです。つまり『愛の夢』といって、それこそ題名にぴったり、ロマンティックな曲を作曲し始めたはいいものの、やはり弾いているうちに我慢ができなくなって、「俺はこんなに弾けんだぜ～」みたいな…(会場：笑い)。

欲が出てしまうのですね。その結果、途中で『愛の夢』はどこに行ってしまったのか。激しいものにしてしまったりするのです。まあ、だから「音楽性のショパン」と言われてしまったのでしょうかね。

さて、先ほど、リストのことをチャラ男と言いましたけれども、本当に彼はチャラ男なのです。当時、恋人が何人もいました。しかも彼の子どもを産んだのは伯爵婦人。今で言う不倫関係でした。

カトリックの信者でしたので、不倫や離婚、そういうものは御法度でした。当時、リストはパリで活躍していたのですけれども、みんなから白い目で見られるのが嫌だったので、その伯爵婦人とともにパリから離れ、イタリア、スイスと、4年間も逃避行をします。そう、不倫旅行ですね！ そんな4年間、彼は曲を書きためて…すごい数の曲を書きました。

のちに、それをひとつにまとめて「曲集」とし

て出版しました。題名はなんと『巡礼の年』…アホか！(会場：笑い)。何が「巡礼」だよ。

そんな女性の敵リストでございますが、ショパンはそれとは逆に、やはり対照的で「一途」でした。

生涯、本当に数人しか恋人はおらず、26歳のときにはマリアという女性と婚約にまで発展するのですが、しかし、彼の体の弱いことを理由に婚約を破棄されてしまいます。その後、なんと落ち込んだショパンは危篤になります。どんだけ弱いんだよ！(会場：笑い)。どうですか。振られて…危篤。草食系にもほどがある！ そんなショパンですけれども、人生最後の10年間はジョルジュ・サンドという女性と付き合いしました。しかし、36歳のときにポイツと捨てられて、今度は、その3年後に死んでしまいました。本当に精神的なショックで死に至る。それぐらい…まあ弱かったといえばそうですし、とにかく繊細だった。そして心がナイーブで、感受性が豊かだったのかもしれない。

ショパンと対照的なリストは、やはり音楽的にもかなり対照的なものがありました。『ラ・カンパネラ』というリストの代表作があります。(清塚：メロディ演奏) こういうリズム、メロディで始まるのですけれども、この曲はリストの代表曲として、フジコ・ヘミングさんがよく弾いていらっやいます。リストといえば『ラ・カンパネラ』、そうおっしゃる方も多いです。知らない方は覚えて帰ってください。実はこのメロディ、リストが作曲したものではありません。これはイタリアに古くから伝わる「民謡」なのです。それをヴァイオリン曲に編曲して披露しました。それをコンサートで聴いていた青年リストは感化され、客席で決意しました。「よし、パクろう！」(会場：笑い)。

そして彼の代表作として生まれ変わりました。この曲、どんな中身になっているのか…。

イタリアの民謡をどんどん発展させて、バリエーションしていくのですけれども、例えば悲しくしたい…だとか、楽しくしたい…だとか、自分で『色』をつけていくことをバリエーションと言いますが、では、リストがどんな色をつけてくれたのかを見ていくと…。

(元のメロディを演奏) これは元のメロディです。(バリエーション1のメロディ演奏) 一つ目のバリエーションです。

(バリエーション2のメロディ演奏)二つ目

(バリエーション3のメロディ演奏)三つ目

(バリエーション4のメロディ演奏)最後…。

何も変わってねえじゃねえか〜！(会場:笑い)。

そう、この曲は何も変わってない！最後に向けてどんどん華やかになっていって、最終的には「どうだよ、俺はこんなにピアノが弾けるんだよ！」というリストのナルシストなところばかりが見えてくる曲なのです。リストの言葉を借りれば「いいじゃん。カッコ良ければそれでいいんだよ。なんかさあ、美学とか、哲学とかさあ、どうしてもイイんだよ〜」(会場:笑い)。

…ということなのですね。そんなリストとショパン。一見、似ている曲を作曲したので、このまま弾くと同じ曲調になりやすい。なので、例えば、僕が子どもにピアノを教えるときは次のように説明します。

ショパンは18歳のときに、コンスタンチアという同級生のクラスメートに一目ぼれをしました。その一目ぼれをした彼女に、なんと2年間も声をかけられなかった…。どうですか、女性の皆さん。

クラスメートが2年間、ただジッと自分を見つめている…。「おはよう」とも言えず、目を合わせるとすぐそらす。見てないふりをします。青白い顔をして、時折「ゴホッ、ゴホッ」と咳をする。

そして、後ろからあとをついてくる。気持ちが悪い…(会場:笑い)。

なので、子どもに教えるときはこう言います。「ストーカーみたいに弾きなさい…。」柱の向こうでショパンがふっと見ている感じ。(メロディ演奏)。ほ〜ら、うまくなった！(会場:笑い)。

リストの『愛の夢』を弾くときは…最初に楽譜に「ピアノ (p)」という記号が書いてある。これは音楽用語で「静かに」という意味。

だから、静かに始める人が多い。(メロディ演奏)リストはそんな静かな愛じゃない。リストの愛ってね、世の中の女性、誰でもいいからみ〜んな愛している〜、そんな強い想いを表現します。(メロディ演奏)

体いっぱい表現してごらん。ほ〜らうまくなった！(会場:笑い)。

『ラ・カンパネラ』を弾いているとき、ガ〜っと激しく弾いているときは、「ああ〜、今、俺が〜この世でイチバン輝いている〜。そう思いながら弾きなさい」。ほ〜らうまくなった！(会場:

笑い)。

こんな教え方をしていると、たいていお母さんからクレームが来ます(会場:笑い)。

さあ、ということで、『ラ・カンパネラ』、聴いてみてください。

◎リスト：パガニーニによる大練習曲 嬰ト短調 S.141-3『ラ・カンパネラ』〜演奏〜

(拍手)

何かね、非常に大きな曲想であるというのが、弾いていてよく分かります。そんなショパンやリスト、200年前…1800年代の音楽、きれいだったり激しかったりはするけれども、それ以外の要素、例えば、何か『ものを表す』とか『物語を表している』とか、音楽以外のことを語っているということはありません。

しかし1900年代に近づいてくると、ドビュッシーとかね、そういう作曲家が出てきます。1900年代になると、例えば『絵』…その絵のとおり音楽が書けないか？あるときは月の光。月の光が差し込んで、ああ、きれいだな、このきれいさ、美しさを音楽にできないだろうか…？

そんなことを考えはじめます。そして音楽以外のことを音楽で表現するようになったのです。例えば、ドビュッシー。素敵な夢を見たら、その夢を、その物語を、みんなにも伝えたい！ということで、自分の見た素敵な夢を音楽にしていきます。

ここから、映画音楽や、今で言うBGMですね、そういったものが発展していきます。ホラー映画の怖い時には怖い音楽が流れる。そういう音楽が発達してきたのは、1900年を過ぎてからということで、歴史的にはわりと最近のことなのだと思います。それでは、ドビュッシーが『夢』を音にしたかったというその曲、聴いてみてください。

◎ドビュッシー：夢〜演奏〜

(拍手)

ありがとうございます。ほんとにじっくり聴くと、ああ、こんな場面なのかな〜、今夢を見てこんな場面なのかな〜と、いろいろと想像できるような曲です。音楽が映像性を持ったのは、1900年以降のことです。それが映画音楽につながっています。



それでは映画音楽の『ニュー・シネマ・パラダイス』のメドレーです。

◎モリコーネ：映画『ニュー・シネマ・パラダイス』メドレー ～演奏～

(拍手)

ありがとうございます。先ほど、ダイジェスト版の映像を開演前にスクリーンに映して見ていただいていたのですが、ボクが俳優デビューした『さよならドビュッシー』という映画…。原作を読んでいたと分かるのですけれども、推理あり、音楽もあり、非常に面白い映画に仕上がりました。来年1月の公開です。実はね、宣伝用の映像があるというのを知らなくて。まだちゃんと見たことがないのですけれども…。今から、ちょっと見せてもらってもいいですか？

◎映画『さよならドビュッシー』宣伝用ダイジェスト映像 ～上映～

皆さんの聴き慣れた『月の光』、この作品の中にも出てきますので、ぜひ、この映画も見てほしいと思います。それでは『月の光』。

◎ドビュッシー：ベルガマスク組曲 第3曲『月の光』 ～演奏～

(拍手)

ありがとうございます。それでは、最後の曲にいきたいと思います。僕はドラマ『のだめカンタービレ』の劇中で、千秋真一の吹き替えピアノを弾かせていただいていたのですが、このドラマのエンディングテーマが『ラブソデディ・イン・ブルー』という曲でした。アメリカ人の作曲家『ガーシュウィン』がつくった曲で、非常に面白い。

本来はオーケストラと一緒にやる曲なのですが、きょうは一人ですので、一人で弾こうと思います。僕は、映画やテレビなど、いろいろなところでピアノを弾かせていただいていた、少しは全国にピアノの良さをお届けできたかな…と思うのですけれども、これからまた、いろいろなところで曲を弾いていきたいと思うので、ぜひテレビで見かけたときはチャンネルを替えないようにしてあげてくださいね（会場：笑）。

クラシックだけでなくポップスも…平井堅さ

んとか JUJU さん、加藤ミリヤさん、東方神起さんとかね、いろいろな方とテレビでコラボレーションさせていただいて非常に楽しいわけですが、でもね、こういったライブでピアノを弾くのは、また違った難しさ、楽しさがそこにはあります。

『のだめカンタービレ』のときは、ドラマをご覧になった方はよくご存じだと思いますけれども、玉木宏さん演じる『千秋真一』…彼は天才音楽家でした。天才音楽家役ですから、台本を読んでもね、イチイチ「千秋、天才的に●●を弾く」。…むちゃぶりがよ～（会場：笑）。

スタジオで録音をしていると、プロデューサーと監督がね「うん、そういう感じでいいんだけど、あともうちょっと、なんか、天才っぽく弾けない？」…傷つきました（会場：笑）。

『千秋』のシーンを弾き終わって、僕が帰ろうとしていたら、プロデューサーに引き止められ「清塚さん待ってください。大変なんです。実は『のだめ』を弾くピアニストがまだ見つからないんです！」そう言われたので台本を見直してみると、のだめ（野田恵）…上野樹里さんが可愛く演じていらっしまったわけですから…『野田恵：変態ピアニスト』と書いてある…。そりゃ見つからないわけだ！（会場：笑）。

ということで、かわいそうに…と思っていたら、プロデューサーが僕の肩をつかんで「清塚さん！あなたならできるはず！」…傷つきました（会場：笑）。

NHK 大河ドラマの『龍馬伝』のエンディングテーマを弾かせていただいたときは、実は3分以上もかかる物凄く難しい曲だったのですけれども、録音当日に、プロデューサーから「大河ドラマのエンディングは1分25秒と決まっておりますので、きょうは1分25秒ピッタリで弾き終わってください！」は？バカな？（会場：笑）。

『FNS 歌謡祭』、それから『僕らの音楽』でも弾きました。テレビとライブの決定的に違うところ…本番の前にカメラリハーサルをやるわけですね。リハーサルのときと本番があまりにも食い違っていると、何分何秒ぐらいにカメラの人がここを映す…というのがしっかりと決まっているので、ズレが生じてしまうのです。照明もそうです。なので、リハーサルのときと同じように弾かないといけなのですけれども、あるときリハーサルを終えて、本番までの時間、楽屋で待っていたら、プロ

デューサーが僕のところに来て「さっき気づいたんだけど、清塚さん、今日、かわいい靴、履いてるね。リハーサルではやらなかったんだけど…本番でさあ、2分40秒あたりで、その靴、バってアップにしてあげるからさ〜」と。

業界用語でアップにすることを「抜く」と言うんですが、「清塚さん、バって抜いてあげるからさ、だから、2分40秒ぐらいのところでペダル踏んでくれない?」(会場：笑い)。

おいおいおい〜!そこで、さっそくカメラリハーサル中に撮っておいたVTRを見直しました。するとそこは、まったくペダルを踏んでいないシーンでした…(会場：笑い)。

しかし、本番は見事に踏んでいるように見せて弾きましたよ…。テレビはね、ライブと違ったそんな難しさや面白さがあります。

『僕らの音楽』では俳優の松山ケンイチくんと一緒に対談させていただきました。彼とは親交があって、何年もお付き合いがあります。松山くんと一緒に初めてやった僕の映画の仕事は『神童』という、彼が主演の映画でした。『神童』…つまり「神の子」。

天才少年少女…。だから、この作品のときは、僕は『神の子』の役のピアノを任されたんだ〜と思って、非常に喜んだのです。そうしたら、違った。実際は成海璃子ちゃんが神童役であり、松山くん演じる「ワオ」という役は、落ちこぼれ音大受験生(会場：笑い)。

僕は人生で初めて、人前で下手に弾くということをしなくてはいけなくて、下手に弾きました(ベートーヴェン『熱情』の一部を演奏)。するとプロデューサーは「清塚さん〜。どこが下手なのか、いまいよく分かりません…」(会場：笑い)。

「そうか…。じゃ、もっと分かりやすく…」(かなり下手に演奏)。「あ〜!、それはちょっと下手すぎるでしょう!」(会場：笑)。

下手に弾くのって、難しいんだなあ…。僕は練習が大嫌いなんだけど、そのときばかりは、1日8時間、下手に弾く練習をしました(会場：笑い)。マジメに下手に弾く練習…。しかし、下手に弾く練習をした甲斐もなく、台本を読んでいると、こう書いてある。「入試当日、ワオ、奇跡の『熱情』を弾く!」(会場：笑い)。そして録音現場に行くと監督が「清塚さん、今日は、奇跡の『熱情』…一丁、お願いしますよ」。なに〜!気軽に言いやがって。何が一丁だ…出前じゃねえんだよ(会

場：笑い)。

そう思いながら録音を終えました。そしてワオくん、奇跡の『熱情』で入試を突破して、見事に音楽大学に入学。大学に入学したあと、レッスンを受けます。そのレッスンのシーンで、シューベルトのこの曲を弾くのです。(『即興曲集 第2番 変イ長調』の冒頭を演奏)すると、あまりに退屈すぎて、先生が寝てしまう…というシーンがありました。監督から「清塚さん、今日は寝ちゃう感じのシューベルトをお願いします〜!」そう言われました。もうムチャぶりにも慣れてきました(会場：笑い)。

で、弾こうと思ったら「あ、ちょっと待って下さい。寝ちゃう感じのシューベルトとは別に、同じ曲の別パターンでサウンドトラック用にも収録したいので、そっちはめちゃくちゃ上手に弾いてください」(会場：笑い)。

ということで、同じ曲で2パターン録音することになったのですが、僕は集中力も体力も残っている1回目のテイクで、サントラ用の非常に上手なシューベルトを弾きました。弾き終わって「ああ、我ながらうまくいったぞ」と余韻に浸っていると、プロデューサーが「いやあ清塚さん、すごいわ〜。ほ〜んとに眠くなった!」…ぶっ飛ばそうか〜!(会場：笑い)。

まあ、そんなこともあり、この映画(『さよならデュッシー』)もいろいろなことがあり、本当に長い時間かけてつくりました。僕の芝居もぜひ見てください。よろしくお願いします。音楽だけじゃなく、ここにいる若い人たちがこれから何を目指すのか、それぞれ必ず特技があると思いますので、個人個人、その特技を生かして、ぜひ、何の分野でも、何にもとらわれず、楽しく、人を感動させられるように頑張っしてほしいと思いますが、そんな願いを込めて、最後に『ラブソディ・イン・ブルー』、派手に、優しくね、弾いてみたいと思います。

この間、ある紳士が僕のコンサートの終演後のサイン会に来てくれました。握手したあとに「君の『ラブソディ・イン・ブルー』聴いてね。君はほんとに手が早い!」。非常に語弊のある言い方で…(会場：笑い)。周りにいた人たちが「え?」。言い方には…気をつけてください。

でも、ホントに手は早いです(会場：笑い)。ということで、『ラブソディ・イン・ブルー』、最後、盛り上がって聴いてください!

本当にきょうはありがとうございました！

(拍手)

◎ガーシュウィン：ラブソディ・イン・ブルー

～演奏～

(拍手)

ありがとうございます！ありがとう！皆さん、これからコンサートに行ったときは、終わったら、ずっと拍手してあげてくださいね。そしたら、行ったり来たりしますからね（会場：笑い）。

でもね、僕はね、あまり好きじゃないんです。なぜかと言うと、引っ込んだときにね、まばらな拍手の時があるんです…。この人たちは聴きたいのか、帰りたいのか…分からなくなってしまう（会場：笑い）。

今日はね、潔くね、アンコール。もう出たり入ったりなしでね（拍手）。ちなみに2曲弾きます（拍手）1曲目は僕が作曲したオリジナルの曲です。『Fortuna（フォルトゥーナ）』。

◎清塚信也：Fortuna（フォルトゥーナ）

～演奏～

(拍手)

◎清塚信也グランドメドレー ～演奏～

(拍手)

(終了)